

ホープ+ステップアップ

ホステップ。

第3号 | 2020年 | 秋
定価440円+税

★想いを伝えたい
21コンテンツ



一書く人、読む人、誰もが幸せになる雑誌を目指して

カルチャーマガジン
「ホステップ」の発行を
応援しています。

浅井精一(株式会社カルチャーランド)

飯村宏美(活動弁士)

猪狩ひとみ(株式会社北海道印刷センター)

伊藤栄一(珈房サッポロ珈琲館)

大高三絵子(アトリエ大高)

小川直樹(ゆるボラGHT)

オホーツク太郎(シンガーソングライター)

仮屋志郎、河合利行

工藤忠(シンガーソング100円ライターのようなもの)

坂本明美(国語専門塾みがく)

下村笑子、荘司泰元(日本サーブ株式会社)

新保るみ子(NPO法人ひまわりの種の会)

清野光一、高橋要(深川市ぬくもりの里「向陽館」)

田中宗明、谷口公志(上芦別パークゴルフ愛好会会員)

田村弘(滝川市)、手島芳久

中林信子(上芦別パークゴルフ愛好会会員)

東出隆(空知生命塾)

堀妃登美(花と緑のEGG 園芸療法士)

前田重和(音楽喫茶ミルク)

松浦正和(株式会社エル・インベンション)

宮田康史(BAR GERSHWIN)

宮部由里子(料理教室taru-koro)

水口正之(株式会社水口新聞販売所)

山本敏(登別映像機材博物館)

油谷良清

和島英雄、和島満子

※敬称略・お名前はアイウエオ順です。

※皆さまからいただいた応援金は、第3号の印刷費に使
わせていただきました。御協力、ありがとうございます。

We are Hear

香西静江 (香西農園代表)

滝川産のさつまいもをブランド化したい



9年前、畑のすみで作ったさつまいもが今や作付面積6反(1800坪)まで広がりました。滝川産のさつまいもをブランド化したい。そのためには、「多くの滝川市民に知ってもらおう事」。香西静江さんの夢は膨らみます。そんな香西さんにも弱みがあり、「朝弱くて、私、よく寝坊するんですよ〜」、眼を細めて顔をゆるめる。でも、「おいも」の話になると瞳が輝く。生産している5種類のさつまいも。1品種に紅甘雪(べにあまゆき)のブランド名が付き、菓子舗の商品素材にも使用され、香西さんのさつまいもの美味しさに魅せられたリピーターも増えている。冬の焼きいもはソールドアウトになる事もある。

さつまいもは九州産のイメージが強いけど、貯蔵次第では、「北海道産も美味しくいただけるんですよ」と香西さん。美味しい貯蔵方法や、就農時の不安をどのように解決してさつまいもをここまで育ててきたのか、お話を聞かせてもらいました。

ホステップ

★想いを伝えたい21コンテンツ

第3号 | 2020年 | 秋
書く人、読む人、
誰もが幸せになる雑誌を目指して

Contents

- ♪表紙 春風と栗鼠 RIKU
- ♪1 We are Here 香西静江(香西農園代表)
- ♪5 語る! 中島洋(映像作家・シアターキノ代表)
- ♪8 ミリケン恵子の「私たちはひとりじゃない」
ミリケン恵子(みみずく舎代表)
- ♪10 スマホdeちょっと紹介 廣田大(札幌夜景ナビゲーター)
- ♪12 私が陶芸家の一年生だった頃 山田祥子(陶芸家/アトリエ祥吉)
- ♪14 国語は「コミュニケーション」力 坂本明美(国語専門塾みがく)
- ♪17 ニヤンてったってアイドル写真館 音楽喫茶ミルク
- ♪18 インタビュー
杉岡直人(北星学園大学名誉教授・まちラボSAPPORO代表)
- ♪22 イマジンしてごらん 菱野史彦(造形家)
- ♪24 今夜も話の花を咲かせましょう
藤井要一(手風琴)
高畑友香(クラシックアンサンブルPALLET)
- ♪29 ほっこり・まんまる村の本屋さん
宙色鉱物図鑑 高橋理久著
- ♪30 魚料理は下処理が8割 宮部由里子(料理教室taru-koro主宰)
- ♪31 まりものはっけん!がってん!
- ♪32 音楽コラム 苺野永仁(フリーライター)
- ♪34 種子法シリーズ 久田徳二(フリージャーナリスト)
- ♪36 まさか自分に? のしろや秀樹(フリーライター)
- ♪40 エンジョイ解放区
- ♪41 コロナ禍の中で 木村功(俳優)
- ♪42 インフォメーション
- ♪44 ポケットに文庫本

※本誌掲載の写真や記事を転載する時はご一報いただければ幸いです。

杉岡直人（北星学園大学名誉教授、まちラボSAPPORO代表）



●これからの『まちづくり』の哲学を語る

●すぎおか・なおと
 恵庭市出身。北海道大学・大学院修了後、社会行動学講座の助手を経験し、1981年北星学園大学文学部専任講師。1992年夏から1年間、オランダ・イギリスで国外研修。1994年教授、福祉計画学科長、社会福祉学部長等を歴任し、2015年から嘱託教員。2020年3月退職し名誉教授となる。まちラボSAPPORO代表。農地所有適格法人株式会社ふるさとファームシニアアドバイザー。著書『農村地域社会と家族の変動』（ミネルヴァ書房、1990）など論文多数。URL <http://www.sugioka-lab.com> メールは sugioka@hokusei.ac.jp

「まちづくり」という言葉には、めんどろで成果の不明なものという、ある意味ネガティブな受け止めがみられます。そうした町々に漂う空気感は、たとえ停滞であったり、住民の無気力感であったりします。でも、そのどんよりした気分を変えたい！。北海道内外で立ち上がる有志が、地域活性化、地域再生の想いを持ってまちづくり活動を行っています。そうした活動を参考事例に、大学に所属して四十年目の退職の春に出版したのが、「まちづくりの福祉社会学」です。そこで、杉岡名誉教授が考えるまちづくりの本来あるべき姿や、地域コミュニティ活動のあり方などを、たっぷり語っていただきました（聞き手のしろや秀樹）。

—今回出版した「まちづくりの福祉社会学」ですが、そもそも福祉社会学とは？

いきなり、そもそも総論的なツツコミありますがどうございます。研究者の弱点をおさえてますね（苦笑）。社会福祉ってなんですか？、とか、社会保障と社会福祉の違いってなんですか？、という質問に思わず怯（ひる）まな研究者がっていると思います？（微笑）分かりますか？（？）するとしたら、福祉視点によるまちづくりの社会学という感じですね。障がい者問題、高齢者問題、女性の自立問題とか、結局、福祉社会をどうするかという事を考えると、みんなが本当に安心して生活に取り組めるような

社会の仕組みが問われる事になる。やっぱり賃金⇨所得保障とか、権利を保障するという事だと思っただけです。そこで、どういう福祉社会を創るのか、という事を「学」として考えていかなければならない。そのためには福祉社会のビジョンとか、福祉理念をみんなで共有出来るようにする事がポイントになるわけです。

—この本には夢を持ってまちづくりに取り組んでいる道内外の事例が紹介されています。まちづくりと夢は関係することはわかりますが、もう一つ、その夢を叶えるための後押しする環境がないと、という問題もありますよね。

よく考えれば、子どもは「夢⇨可能性」をお金では判断しませんよね。現実的な可能性を考えるとというより、やっぱり漠然としたイメージや夢を語りますよね。

小さい子どもが大人に成長していく過程で、コミュニティが受け皿になっていくだろうし、そのコミュニティには、子どもを支える仕組みとか子どもの夢を守るシステムがある。これがポイントですね。よく、みんなと一緒に暮らせる多世代共同社会とか、地域共同社会というけれど、それは誰かと誰かが仲よくするというのではなくて、みんなで作る社会をどうやって考えるのか、みんなが担い手になるような仕組みをどのようにして作っていくのかという事です。

この本にも書きましたが、大事な事は、私達の日常生活の中で夢が必要という事です。夢に向かって話し合ったり、協力する文化をもてなきゃならない。

地域が夢を応援する環境をどう作るのかです。今までのように、なんでもいから移住して住んでくれれば、土地を提供するとか保育所を用意するというのではなくて、やっぱり、田舎で勝負したい人を応援する仕組みを用意する。日本の各地で、「霞が関⇨東京での仕事」をやめて、田舎暮らしを楽しくやるみたいなのも増えている。テレビ番組のポツンと一軒家じゃないけど、不便だけど豊かな自然に憧れて各地の物件を探し、住宅建設から生活に必要な事を全部自分で作り上げる。子どもの頃の夢を田舎暮らしで好きな事をして実現させる喜びですよね。自分の能力を試したい、人に指図されてやらされるんじゃないで、自分で考えて家を作るとかね。本来は創造的な仕事をやる人が、地域の中で生活していけるというのが重要で、情報収集を必要とする事に不可欠なネット環境が充実していると、やる気さえあれば道は開かれるし、やりたい人は黙っていても、なんか立ち上がっていくところはありますよね。

—コロナ問題もあつたりして、経済が疲弊する中で道内各地がまちづくりをしていくうえで、経済対策の考え方がありましたら。

経済活動で大事なのは仲間と流通を支える人達の存在で、消費者と生産者がちゃんと直接つながるための様々なつなぎ役というパートナーが必要になってくるのかなんて思いますね。これからは、小さい企業が協力し合っ
てうまく助け合うという個の時代になっていくように思います。ホステップがその応援団として、みんながつながるパートナーとして、こんなところにこんな人がいるみたいに、新たな出会いというか発見を地域の中に見出して、いこう、という事で力を発揮していただく事も大事な、と思いますね。

—ありがとうございます。最近、女性がアイデアも行動力もあるように感じますが、その点はどう感じられますか。

男性の場合は、職場の中で根回しとか色々やってくれるから、結論をだすためにやっているうちにダメになるみたいなところがありますね。相談しているうちに、それは無理だわ、というようにやる前につぶれてしまう。日本社会というのは失敗を許さない、失敗させないとか、失敗したらどうするんだ。俺は何も聞いてないぞ、とか、失敗したら誰が責任をとるのかみたいな話になってしま。その結果、忖度とかトライさせない社会になってしまったみたいなのがありますね。NPO団体のリーダーの大半は女性です。活動はテマヒマかかる事が多

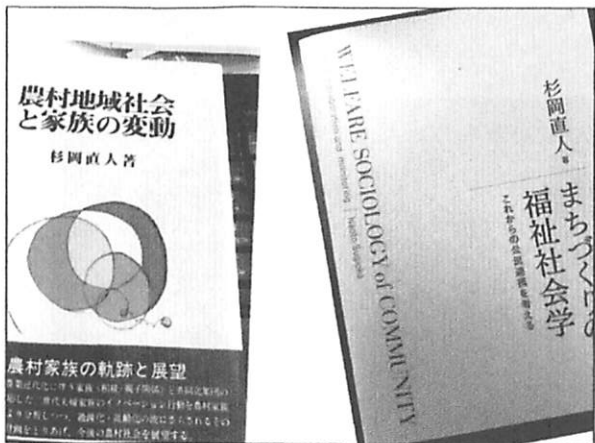
いわけですから、洗濯掃除をしながら料理を作るという日常生活の器用さですね。男性も、新しい日常は女性の日常スキルに学ぶ事だと思います。

—夢のあるまちづくりにはリーダーの存在が欠かせないと思いますか。

実は、まちづくりに関しては、意図的にリーダーを作らないと言う人もいて、リーダーを作るとそのリーダーにみんなが従っていくだけになってしまふところがありますよ。普通の会社の組織経営はリーダーがいなくてぐちゃぐちゃになってしまふけど、今はワーカーズという活動があつて、五、六人でいろんな活動をやつて、みんなが話し合つてみんなで決める。そういう協同組合みたいな取り組みもあつていいし、みんながリーダーというか、みんなが責任を持つというか、責任の共有原則にまちづくりがなるんじゃないかと思えますね。それが本来の民主主義だと思ふし、足をひっぱるのではなくて、みんなが責任をもつという事で機能していく。

結局、面倒くさいといつてお任せしたらおしまいなんでしょうね。みんなが関わりたくないという責任逃れをやっているうちに、結果的に独裁者が生まれた歴史もあるし、現代ではアメリカのトランプでもイギリスのジョンソンでも、強いリーダーが決断を下すというマネジメントの流れが出てきているから、これが大変ですよ。

ちゃんと軌道修正をうながすようなチェック機能がなければ駄目だという事です。今回の私の本でも、やっぱり民主主義の基本はモニタリングという事を書きましたが、みんな決めて、それをちゃんとモニタリングするというのが機能が働かずに、なんでも決めてばなしだったり、あの事はわかんないじゃ駄目ですね。失敗させないという意味で、やる前から取り組みをやめさせるのではなくて、やったら、どういうふうなこれをするかやっつけていけばいいのかという、バックアップをね、ちゃんとモニタリングしていく事が大事ですね。



▲最新刊「まちづくりの福祉社会学/これからの公民連携を考える」(中央法規,2020)は、定価2800円(税別)で電子書籍Kindle版あり。

—この三月に大学を退職したわけですが、これからはどのような発信をしていくかを、最後に。

今は、人とのつながり、コミュニケーション、情報収集などがインターネットで発信受信出来ますよ。それも一人でも出来る。また、社会に対して積極的に問題提起をしたり、考え方を問う事も、ブログなどもあつて昔に比べたら極めて簡単に出来るようになっていきます。ひとりひとりの考え方をみんなが共有出来る場が出来てきたというのは、革命的な情報民主化が実現されていくという事です。

そうした社会の中で、今までは大学教授という研究者的立場での観察者の性格が強かったけれど、これからは責任ある個人として、コミュニティのメンバーとして考えたり、活動に関わりながら、自分が今まで語ってきた事を検証したり、自分なりに一人の地域住民として発信していきたいと思っています。

ものを作るには時間もかかるし、仲間も大切です。私は元々農家の出身ですから、新しい社会のあり方について、主に農業とか食に関係する事にこだわって行きたいと考えています。

—失敗、改善を繰り返して、それをみんなが話し合つて夢を育てていく。それが、これからのまちづくりの健全的なあり方ですよ。本日はありがとうございます。